

図書館サービス展開の更なる構想は？

石田英子

はじめに

私が就職した昭和40年は、千里山図書館（現簡文館）専門図書館（現円神館）と天六分館の三館がありました。関西大学の図書館は大正14年福島学舎時代に、本学初の独立した図書館を創設してから昭和3年千里山に鉄筋コンクリート造りの図書館、昭和4年天六学舎に図書館（天六分館）を設置、昭和24年には千里山図書館に開架式閲覧室と書庫の増設、昭和39年は専門図書館を、更に昭和60年には総合図書館を開館、また平成6年に総合情報学部の開設で高槻キャンパスに図書室が開室というように大学の発展と共に拡充してきた。学術の中核を担う図書館は、本学の歴史と伝統に培われ、教育・研究支援のため高度な学術情報サービスの展開を続けている。

天六分館は、学習支援として日曜開館を続けてきたが平成6年二部の千里山移転に伴い有終閉館した。専門図書館は、主に経済学部と商学部に関する専門書と工学部関係の資料が置かれていたが昭和60年総合図書館に統合された。本館の大閲覧室には、イギリスの詩人評論家エドモンド・チャーレス・ブランデンが本学図書館のために「書物」と題する自作の詩の一節を毛筆で書いた額が、壁上を飾っていた。



筆を進めるE・ブランデン
（『関西大学学報』第231号より転載）

E・ブランデンは、文化使節として来日、昭和24年来学した折に「BOOKS」と題した詩が贈られ第4代図書館長・堀正人がこれを訳している。

図書館の歴史は、「図書館80年の歴史」としてフォーラム創刊号から4号に記載されているので詳細はそれを一読されたい。私は昭和45年から53年まで本館に勤務し、また平成11年から総合図書館勤務と二度図書館で仕事ができた幸せをかみしめている。去るにあたり図書館の長い歴史のほんの一ページにすぎない在職中の事を記し文面に表現されていない図書館の有様を感じとっていただければと思う。

昭和40年代後半からの図書館

昭和45年千里山図書館（本館）運営課勤務となり、相互利用係と個研係を主に担当した。当時本館には、図書課と運営課の2課があり、図書課は図書（和書、洋書、雑誌）の収集・整理を主とし、運営課は、閲覧サービス全般と施設設備の管理を主とした事務を掌っていた。現在の閲覧参考課の業務は運営課に属していた。

信じられないホントの話は、現在机は課員全員にありますが当時のカウンター業務担当者には事務机はなかったのです。書庫内にある休憩室の大きな机で書き物をしていたのが懐かしい。庶務係、相互利用、個研係に机があってカウンター担当者には不思議とお思いでしょうがカウンター業務は座る暇がなかったのです。利用者から資料の請求があれば書庫の1階から6階まで書庫内階段を昇降して資料を探し提供していました。その階段も鉄製だから昇降のたびにカタカタ音が響くのです。エレベーターは夢物語でした。勿論冷暖房はありません。夏は蒸し風呂、冬は冷蔵庫の中にいるようでした。書庫内にブックトラックを乗せるリフトはありましたがエレベーターはありません。図書を配架するときは、リフトにブックトラックを乗せ希望の階のボタンを押して昇降確認後一目散に階段を昇降してリフトの止まる階に行ったものです。

古いも若人も一緒に書庫内を走りまわり資料提供

するという現在からは想像もつかないハードな毎日でしたが仲間意識は強くしんどいなかにも楽しい職場だったので、ロマンスも生まれ何組かゴールインしています。また書庫内に除湿機が置かれていて毎日毎日各階のそれにたまった水を外に捨てる作業もありました。

利用者が貸出手続きする用紙はカーボン紙をはさんで複写した用紙を使用していました。後にノーカーボンのカードができ、現在事務用カードボックスにある古い科研貸出カードがそれです。また目録カード作成は図書課の業務でカードボックスに繰り込む作業は全館体制で行ったものです。繰込みとは書名目録カード、著者名目録カード、分類目録カードをそれぞれカードボックスに差し込んでいくのです。やってもやってもカードは配賦され終わりなき戦いでした。図書館の仕事は一見楽そうですが、体力と、根気の要る仕事なのです。カード作成にあたって関大では、天野方式たるカード作成方法がありました。

天野とは昭和41年まで図書課長の任にあった天野敬太郎で目録の記述に「洋書目録の関大」と評価されて、権威をもっておられた方です。カード記述はペンで書き、ローマナイズは英文タイプでという作成方法でした。私は個人研究費で購入した資料を図書館の蔵書として扱っていた関係で目録カード作成をはじめ装備（登録番号の付与、蔵書印押印、ラベル貼付）、図書原簿の管理、支払い業務と図書館資料の受け入れから提供までのトータル作業に携わりました。

当時の個研を扱っていた部屋（現在東西学術研究所事務室）は階段近くだったので利用者の昇降の音が常に聞こえていました。個研の隣は研究者が書庫入庫して貸出等手続きする部屋でした。その奥は庶務担当コーナー、運営課長室、館長室、会議室へと続いていました。図書課は円形の2階にあり、庶務、和書、洋書、雑誌担当がグルリと一周した形で配置されており、ブックトラックで各担当の境をしていた状態でした。

学部事務室から異動してきた私は、図書館の静寂と年度末への取り組みが学部のそれとは大いに違っていたことの驚きがありました。個研業務の年度末作業を一人忙しそうにしていた私に通りがかった図書課長が不思議そうに、「何をそんなに忙しそうにしているの。図書の整理は年度末もないのだからゆっくり、きちんとすればよい。年度末処理が遅れても僕が謝ればよいことだから」と言われた言葉が不

思議と耳に残っている。資料の整理は丁寧にすべきで時間に追われてするものではないとの見解からの発言だったのではと思います。カード書き10年といういわゆる職人的作業の進め方の世界で良き時代だったのかも知れません。また運営課長には「よく本を読みなさい。広く知識を得ることは何事にも応用が利く人になれる」との言葉をいただいたが、専門となる知識の習得ができなかったことが悔やまれる。カウンター業務の先輩達は、それぞれ自分の専門を極めて学生や研究者に適切な図書指導をしておられたことには脱帽です。ある人は雑誌目録を、ある人は古文書の専門、また洋書に強い人等々です。

昭和44年から始まった学園紛争の波を受けたときのことは、「図書館80年の歴史」に数行で記載されているが、実態は大変なものでした。図書館前の広場では「全共闘」の党員が竹で突く動作・なぎなたの練習みたいな演習訓練をしていて図書館に近づけませんでした。学園紛争で学内立ち入り禁止となり学年末試験を全科目レポート試験に切り替えた昭和47年、50年は図書館としてはレポート作成に資料が必要なのに図書館から提供できない状態をどうすべきかと考え、名神高速道路上に毎日目録カードを運び利用者の要求に少しでも応えられる所作を講じたのです。当時は資料請求をするためには目録カードに頼るしかなかったからです。学生から請求があった資料は時間をきめて本館まで取りに行き、フェンス越しに職員に手渡し、学生に提供していました。

法文坂を一日何往復もして対応できたのも毎日書庫の階段を昇降していたお陰・いわゆる怪我の功名かと思ったものです。この経験から今度図書館を建設するときには、正門から直接図書館の利用ができるところ即ち今の新関西大学開館北棟の位置あたりを候補に上げたいと思ったものです。学内立ち入り禁止等あっても外からの利用が可能と真剣に考えたものです。

大学図書館は、教育・研究支援を前提に資料（情報）の収集、整理、保存、提供すべきであると心得ている図書館人の夢を実現したのが学習図書館機能と研究図書館機能を備え中央図書館の役割も果たしている総合図書館です。

印刷情報に加えてマイクロ、CD-ROM等ニューメディアの出現で情報媒体の多様化が急速に進みサービスの有様も変化していった。昭和23年に雑誌目録の刊行に始まり増田文庫目録まで22輯刊行された関西大学目録シリーズは全国の大学図書館から注

目された。これらの蔵書目録を各大学のそれと交換し、お互い文献の複写や相互貸借の協力体制、いわゆる相互利用が拡充していったのです。昭和45年頃はそれぞれの大学のルールに準じて相互利用を展開していたが昭和49年に私立大学図書館協会西地区部会阪神地区協議会加盟館による「阪神地区相互利用に関する協定」により共通の申込み様式等を定めて閲覧複写及び相互貸借が行われてきて現在も協定内容の見直し、検討が続けられている。

海外文献の相互利用は、ILLに申込書(複写式)を封書で送付して請求していた。海外文献を必要とされた先生が相談に見えられ、文献複写依頼ができることをお話し、手続きを進め数力月のちに文献が届き受理された先生の喜びは大変なものでした。完成した論文をいただいた思い出があります。この頃は相互利用のPR不足のうえに、他大学まして海外文献の入手など夢のように思っていたからでしょう。

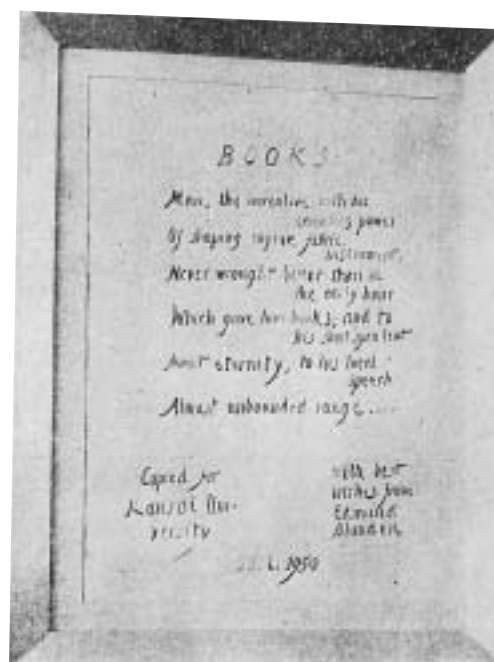
他大学との相互利用が広まった背景には複写機の進歩も見逃せないでしょう。昭和31年のマイクロ写真による複写提供に端を発し、昭和40年ゼロックス複写機の導入により画期的な発展となったのです。ゼロックス複写機は高価な贅沢品でした。当時の学生は資料に必要な箇所はノートに筆写していたのです。図書館に1台設置されたことで資料の複写は容易にできるようになりましたが、なにせ高価なものだったことと、著作権問題等の関係から利用者には直接複写させずカウンターで複写申込みを受付職員が複写し、後日手渡す方法の複写サービスを昭和59年まで続けていました。

資料検索方法についても本学図書館は、機械化、電算化を昭和40年代後半から始め、昭和52年にシステム開発プロジェクトチームによる「関西大学学術雑誌管理システム」と称するKULPIS:Kansai University Library Periodicals Information Systemsの自館開発が、FACOM 230-38の基で開始し、昭和53年度に全システムが完成した。稼動したオンラインの画面を見たときの感動は忘れられません。昭和58年以後閲覧貸出システム、学外のデータベースによる情報検索の導入とサービス展開を積極的に推進している。現在は、KOALAの検索による資料提供並びに、複写機のセルフサービス、カラーコピー機の設置、マイクロリーダー、インターネット環境の整ったパソコンの設置と利用環境を整備して利用者サービスの拡充を推進している。

終わりに

総合図書館はアウトソーシングを導入して、開館日数の増加、開館時間の延長という利用者の要望に応えた。アウトソーシングは大学の教育・研究に資するためのサービス向上に、外部の専門的ジェネラリストを確保することで繁忙期であれ、閑散期であれ、利用者に質的レベルを一定に提供できる。平成12年から導入しているアウトソーシングは、業務の一括請負でなく、コーソーシングという新しい概念(オペレーション上の業務プロセス・進行状況・問題点さらに改善すべき点まで開示し、常に効率の良い運営を「共同事業」という形で遂行する。)を基としている。

図書館サービスとは、施設の拡充や電算化が即それに結びつくのであろうか。サービス業務は開館日数を増やし、開館時間の延長、利用者が自由に資料にアクセスできる状態ができたらいのだろうか。資料形態が多様化している今、厳選された資料、利用しやすい状態、適切な情報提供こそ求められるサービスではないだろうか。直接的なサービス提供を課業とする我々は、どのようなレファレンスサービスを提供すべきであろうか。大学図書館は、多くの利用者になるべく簡単に、また平等に資料を利用し活用できる場所でなければならない。利用者に正しく対応するためにはまず基本的な礼儀をわきまえていることが必要であり、特に誠意が必要であろう。



「関西大学のために」と署名されたE.ブランドン書の『BOOKS』

しかしただ親切なだけでもだめで、それなりの知識・経験そしてそれに裏付けられた心配りというものが必要ではないだろうか。図書館員の専門性とは、図書館資料にたいして一定の「見識」をもっていることである。重要なのは「見識」であり、単に「知識」だけではない。「見識」とは、「生きた知識・応用自在の知識」と言い換えても良い。そしてまた、この「見識」は利用者の有する「常識」と一定の水準において通底していなければいけない。

一般にある職業に従事する人の専門性を云々する場合、その人が業務の内容についてどれほど精通しているか、さらにまた不測の事態が発生した場合にどこまで臨機応変に対処できるかにかかっていると言える。どんなに博識であってもものの役にたたなければ職業人として失格だろう。前述した運営課長の「本を読み…応用がきく人になる。」はまさにこの専門性を育てる言葉であったのだろう。従って図書館員は多くのことを知っておく必要がある。それも教科書的知識でなく、身をもって正確に知らねばならない。図書資料の内容以外、印刷、製本、出版、流通、更に文献の利用と評価についても各自が図書・資料にたいするセンスと見識を身に着けることが利用者への最大のサービスに繋がるのではなかろうか。

四半世紀の間に情報社会はめざましく発展し、氾濫していった。インターネットを中軸とした学術情報ネットワークの発達、CD-ROMなどメディアの多様化、電子出版を始めとする情報のデジタル化等の変革期にあって本学図書館はめざす方向として「ビジョン7項目」を策定し、この具現化に日々取り組んでいる。図書館利用教育の実施において情報リテラシーの養成が必要な今、平成14年度に、いままでのガイダンスに加え「体験実習型ガイダンス」

の実施を計画し、情報リテラシー教育を図書館員が主体となって授業内容に即したデータベースを活用して実施した。今後情報発信能力育成に繋げる必要がある。世界の情報がネットで繋がり、入手できる現在、大学図書館以外に地域でも電子図書館化が進んでいる。奈良生駒市は市内全域に張り巡らせた光ファイバー網を活用した新しい学校「いこまe学校」をスタートさせ、子供たちが読書に興味を持ってもらう目的で、大学の協力を得て、4月から手のひらサイズの携帯情報端末機(PDA)で読書する電子図書システム「e-ライブラリイ」が開始される。それはインターネット上で公開されているすべての作品の閲覧が可能になるというニュースが報じられている(産経新聞2月)。我々のめざしている電子図書館、電子展示がまさにそれへ結びつくのです。

図書館は、どんなに蔵書数が多く、設備や環境が整っていても利用者がいなくては成り立たない。学生の読書離れや学力、マナー低下に図書館は、図書に対していかにして興味を持ってもらえるか、学習・創得意欲向上など教育現場が抱える課題に図書館や情報化がいかに力になり得るか、どんなサービスの展開ができるのかが今後のテーマとなろう。また常に時代と利用者の声を積極的に取込み、更なるサービスの展開が推進されることを期待してやみません。

〔参考資料〕

- 関西大学百年史
- 関西大学図書館フォーラム
- 早稲田フォーラム

(いしだ ひでこ 大学院事務室 前閲覧参考課長)